

# ラッツェル『人類地理学』に関する地理教育的論考察

山口 幸 男

(群馬大学教育学部社会科教育講座社会科教育研究室)

(2007年9月12日受理)

## A Study on the F.Ratzel's Geography from the Viewpoint of Geographical Education

Yukio YAMAGUCHI

Department of Social Studies Education, Faculty of Education, Gunma University

(Accepted September 12, 2007)

### 1 はじめに

古今における最も重要な地理学文献の一つであるラッツェル(1844-1904)の大著『人類地理学第一巻、第二巻』(1882, 1891)が由比濱省吾によって訳出され(由比濱 2006)、ラッツェル地理学の真の姿を広く論じることが可能となった。まことに喜ばしいことである。本研究は、この訳書をもとにして、ラッツェル地理学の特徴を、2の(1)~(7)の7項目の観点から考察することによって、ラッツェル地理学に対する誤解、偏見を是正するとともに、それらをふまえ、ラッツェル『人類地理学』の今日における地理教育論的意義を明らかにしたい。ラッツェル地理学の解説書としては、飯塚(1940, 1949)、シュタインメツラー(1956)、野間(1967)、水津(1974)、クラヴァル(1975)などがあるが、いずれも地理学研究の立場からのものである。

『人類地理学』(訳書)は、第一巻が全399頁、第二巻が全604頁という大部のものである。以下の本稿文章中の「●資料」ア~フは、『人類地理学』(訳書)からの引用文及び頁で、そのうち、「メ」だけが第二巻から、それ以外はすべて第一巻からの引用である。

### 2 ラッツェル『人類地理学』の特徴

#### (1) 『人類地理学』のテーマ

『人類地理学』はその正確なタイトル『人類地理学第一巻—歴史学に適用した地理学の概要—』(1882)、『人類地理学第二巻—人類の地理的分布—』(1891)から明らかのように、地理学と歴史学の境界領域を扱っている。これはカール・リッターが「自然と人間」「舞台と歴史」の相互関係をテー

マとしたことを引き継ぐものである。なお、リッターの主著のタイトルは『地理学—自然及び人間歴史との関連における—、または一般比較地理学—自然科学及び歴史科学の研究と教育における確かな基礎として—』（1817）である。

ラッツェルにおける歴史とは「過去・現在にわたる人間・社会の行為・行動の総体」のことと思われる、人類とは「過去・現在にわたる人間・集団」のことを指していると思われる。この意味での人類・歴史が人類地理学の対象であり、この対象に地理的なアプローチを試みたのが『人類地理学』の研究である。

ここでいう地理的なアプローチとは、人類・歴史に対して「地球・自然・空間・土地等」の観点から考察することである。このようなアプローチは従来ほとんどなされておらず、これによって人類・歴史に関する不明部分を明らかにすることができるとともに、地理学の新しい研究領域を確立することができるラッツェルは考えた。

### ●資料

ア 地理学はリッターによる新たな発展以来、自然と人間、舞台と歴史の相互関係という昔からの哲学的問題を特に好んで取り上げ、その解決に到達しようと試みてきた。p.9

イ 歴史を考察する見地が高まれば高まるほど、人類の活動する舞台が堅固で、いささかも変化していないことが一層明らかとなり、地理学が歴史過程の自然条件を研究する根拠となる。歴史における地理学的要素の必然性がますます明瞭となってくるのである。p.9

ウ 歴史はその土地抜きでは理解できず、またある場所の地理はその上に痕跡を残した歴史の知識なしでは叙述できないという結論がでる。p.56

エ 地理学にとって最も重要なのは、常に地表を研究し、記述し、描写することである。歴史学は時間的な事件を、地理学は空間的な存在を扱うとされているが、事件はすべて空間において行われる。したがって歴史はそれぞれその舞台を有することを忘れてはならない。p.56

オ 地理的事象と歴史的事象を思索的に結合させようとする正常な努力が、ますます私に共感を起させた。序文

カ 小著は歴史的・地理的境界領域の諸問題を精密かつ体系的に取り扱おうという要求のために、実用的に生まれたものであります。序文

### (2) 地球的統一、生命的統一

ラッツェルが対象とした人類・歴史は地球があってはじめて存在するものであり、地球とともにあるものであり、地球の一体性の中にあるものである。地球から生まれた各生物は生命的一体性を持つ。つまり、人類は動物、植物など他の生物とともにあるものである。

このように、ラッツェルは、地球上の「全事物及び人類」の根源として地球があり、それゆえ、地球の一体性、生命的一体性を考えることができたとした。

## ●資料

- キ 地上の万物は深い必然性をもって一つに結合・構成されている。p.1
- ク 地質学も古生物学も、地球上の生物の歴史が唯一にして統一的なものであったことを教えてきた。空間的にも素材的にも地球に結びつけられた生物が常に存在したのである。我々が人間の分布に関する学問を地理学の一分野と見る理由も以上の点にあるのである。p.5
- ケ 我々の科学は人類の住んでいる地球を研究すべきであり、人類の生活は動植物の生活と同様に、地球から切り離して考察することはできない。地球と地球上に成長し繁殖する生命との相互関係は、両者の欠くべからざる連鎖として特別の研究対象とされなければならない。p.9
- コ 地球上における生物の分布に関する学問は以前から論理的には要求されていたが、現実的には単にその一部が成立しているだけである。植物地理学、動物地理学、そして人類地理学である。私自身、動物地理学・植物地理学と並んで、人類地理学を独立して打ち立てようと試みてきた。しかし、地球上の生物の分布に関する総括的叙述はいまなお存在しない。p.4
- サ 人間社会から地球を取り去ったならば、人間社会は塵埃になってしまわないであろうか。我々は人間の精神がいかなる一層高い範囲に属するかは知らない。我々が知っているのは、人間は物質的に、物理的に、そして進化史的に、地球に属しているということである。したがって、人類地理学は生物地理学の一部門に過ぎないと考えることができる。生物地理学上の一連の概念はそのまま人類の分布に適用されなければならない。p.1
- シ 我々の眼前にある人類は、人類自身の歴史の所産に他ならず、同時に地球の歴史の所産でもある。二つの歴史は不可分に結ばれてきたし将来においても同様であろう。人類は、創造の樹の最高の花として、古い生物形態よりも早く凋落するかもしれない。pp.3-4
- ス 人類は地球の一片であり、地球の以前の全歴史はこの地球発展の最高者の出現のための準備であると見ることができる。p.14
- セ 人類の歴史全体は地球上において、そして地球とともに行われた発展である。p.64

## (3) 自然の影響、土地の力

『人類地理学』は人類・歴史に対して、従来きわめて不十分であった地理学的アプローチを試みたものであるが、その場合の地理学的アプローチというのは、既に述べたように、自然条件の面から、即ち、地球・自然・空間・土地等の面から考察することである。ラッツェルは、自然・土地の影響は大きく強く、永続的に作用する条件であると考えた。この考え方が、その後、いわゆる「環境決定論」として流布されていった。

## ●資料

- ソ この過程の中で地理学的に重要な事柄、すなわち自然、環境、舞台に属する事柄は、人類に属する事柄に比較するときすべて不変的であるということである。一定の形の岩に当る波が常

に同じ形に碎けるごとく、一定の自然条件は生命の動きを常に同じ進路に導き、それらに対して永続的に同じ意味において、制約かつ条件であり、そしてそれは絶えず更新されるのである。

p.9

タ 我々は自然が人間に及ぼす4種類の影響を有することになる。

- (1) 各個人内部に永続的な変化を起こすに至る、各個人の肉体あるいは精神に対する影響。
- (2) 民族集団の空間的拡大を指示し、促進し、妨害する作用。方向、距離、位置および限界は、これによって決定される。
- (3) 空間に付随して民族の内部的特質に及ぼす影響で、1民族の隔離およびそれらによる一定の特質の維持・顕著化を、そうでなければ混血とそれによる特質の摩擦を促進する。
- (4) 最後に、天恵の提供の多少により、一時は生活必需心の、次には商工業経営に用いる物品の、そして貿易・交易促進によって富裕化するための物品の獲得の利便・困難により、1民族の社会構造に及ぼす影響。

地理学は後の3問題に非常に近い関係にあるが、第1の問題からは非常に離れている。したがって人間の運命に対する自然の影響という全体問題に接近する前に、以上のすべてを区別しておくことが絶対必要である。p.31

チ これらの場合はすべて有機体なのであって、多かれ少なかれ土地と永続的な結合に入っており、土地は有機的に作用し、有機体は土地に作用するのである。民族は土地を失うことによって衰退するのである。人口は減少してもよいがなによりも土地をなお固持しておればよく、そうすれば民族の救済手段もあるのである。しかし土地を失い始めるならば、それは確実に、いっそう衰退する始まりなのである。p.43

ツ おそらく我々の見解は、土地—これなくして民族は存在しえない—の配慮を要求するゆえに、民族や精神力を有する人間一般の価値を軽視するという非難を浴びるであろう。しかしなんといいて真理のみが正しいのである。真の実際政治は常に強い地理的核心を有する。p.47

テ 歴史の全段階を通じ、また現在の生活がいかに豊富であっても、仮借なく通用するこの深刻な作用を及ぼす土地の力には、人間の外見的な自由を簡単に否定して恐れを抱かせる、なにか神秘的なものが存在するのである。土地は不自由の最も深い中心地であり、固定し、常に同一で、人間の変わりやすい気分の下にあって同じ地位を占め、人間が土地という基礎を忘れるたびごとに人間の上に現れ出て支配するのであり、あらゆる生物は土地に根ざしているということは重大な警告であると、我々には思われるのである。土地は残酷にも盲滅法に歴史的運命を分配する。民族は得た土地を保持し、その上で生を十分に享樂し、土地に適応しなければならない。p.48

ト 自然が各個人の肉体と精神に、そして各個人を通じて民族全体に及ぼす影響が取り上げられる。それは主として人間の肉体の土台となっている気候、地形、土地の植物性・動物性産物の影響である。あらゆる自然現象は精神を介して気質と行動に対して、あるいは極めて明瞭に、

あるいは不思議なほど微妙に影響するし、あるいは精神活動を繁栄するのみであるように見えたり、あるいはこれを活発にしたり阻害したりする。宗教、科学、文学においても我々は環境の影響に遭遇するのである。p.51

#### (4) 人間の自由意志と限界

しかし、ラッツェルは人間は自由意志・思考力などの高度な精神を持ち、他の生物とは異なる特別な地位にある存在だということも十分に認識していた。その一方で、人間には越えることのできない自然的・地球的限界が存在するとラッツェルは考えている。

これらのことから、ラッツェルの「自然と人間の関係」の捉え方は、従来言われてきた「環境決定論」というよりも、「環境（自然）基盤論」として把握するのが正しいと思われる。

#### ●資料

ナ 人間が動物・植物と並んで第三の有機物の系列を形成したのは人間にはさらに精神が与えられていたからである。人間の精神は地球上におけるまったく新しい現象である。地球上の生物の容貌を最も深刻に変形させた人間ほど、永続的に、しかも多数の他の生物に対して影響を及ぼしたものは存在しない。p.3

ニ 人間があらゆる生物の中で最高の組織を有することは疑う余地がない。総じて人間はその外部を進む万物を感覚的に知覚する最良の手段と、いかなる動物よりも思考力の豊富な精神を持っている。また、移動と定着の手段も甚だ有効である。人間はこれらの動物すべてよりも多方面の能力を持ち、さらに意味あることは、自己の精神の中に、自然から与えられた以外に別な道具をつくりだしよく目的を知って使用する能力を有することである。人間は多くの点で束縛された動物に比較すれば自由であると考えてもよく、人間はその精神によって他の動物よりも自然の枠組みから解放されている。pp.38-39

ヌ しかし人間は、四囲の自然から提供された手段を賢明に利用する場合にのみ、このような自由を獲得するのである。したがって、人間の自由も根底においては自然の賜物にほかならず、心ならず得たものであるどころか、烈しい努力によって奪い取ったものなのである。p.39

ネ 人間の意志の自由は、人間の地理的分布が外的諸条件に依存していること、例えば植物または動物の一種と同様に地球の極地方や乾燥地方から閉め出されている事実をなんら変更するものではない。p.65

ノ 人間の自由意志はこれらの国々において、このような自然的限界を外側へずらせたり、その制約を耐えやすいものにするために色々のことを行い得るけれども、決して限界を根絶することはできない。それゆえ、各民族はその土地の特徴を示している。人類地理学は常に限界内にある民族を相手としなければならず、常に民族をその土地の上でのみとらえるのである。p.66

ハ わが地球全体が人類の地球となっている。地球の5億1000万平方kmは空間の最大限の広さ

を意味し、人間の生活、地上での民族移動、そして伝え難い天体の精神的把握をも許されているのである。しかし、ここには限られた物質があり、ここには生命の根底があり、ここには同時に生命の発展可能性の最外部の限界が与えられている。地球最古の生命はこの空間に依存し、この空間に制約されていた。それは人間の発展を経験した新しい生命と同様である。地球空間は、地球に結びつけられた生命の、最初にして不変の制約である。ここかしこにいる民族を想像することはできるが、人類には唯一の地球空間しか存在しないのである。p.157

#### (5) 自然からの離脱

自由意志、思考力を持つ人間が自然に働きかけ、社会・文化を発展させていくことは、自然の影響を弱め、自然からの離脱の度を強めていくことと単純には考えられるが、ラッツェルはそのようには捉えなかった。人間が自然を利用し、文化を発展させていくことは、多様かつより広い結合という意味で、人間と自然との関係を一層緊密にさせるものとラッツェルは考えている。

#### ●資料

ヒ 民族は絶えずその基礎となり環境となる自然からの離脱の度を加えているというならば、それは明らかに誤った解釈である。大ブリテン、ドイツ、ベルギーの文化全体がこれらの土地の自然が与えた石炭・鉄という埋蔵物に依存する程度は100年前よりも現在(1899)のほうがはるかに高いのであり、その限りにおいてこれらの諸文化は、以前にはほとんど存在しなかったか意識されなかった新しい紐帯によって土地に結びつけられたのである。p.39

フ 文化の進歩の大部分は、自然的所与の利用を徹底的に行う方向に動くこと、および進歩をこの意味にとれば民族と土地との関係はますます密接に発展していくことを一つの法則としてもよいであろう。否、もっと一般化して文化に伴って民族の土地に対する関連はますます密接になるとまでいうことができる。p.39

ヘ 自然民族の生活様式は彼等が不利な影響の圧迫から逃れるのを許さない場合が多いことを直ちに理解できる。したがって、我々はそれを自然環境の影響がいつそう強いものになると誤解するのである。p.39

ホ 自然民族というのは自然と最大限に密接な関係を有する民族ではなく、自然の束縛の下に生活している民族を意味するべきである。p.39

マ 文化は自然から完全な離脱という意味ではなくて、多様かつより広い結合という意味においての自然からの自由である。我々は自然を詳細に利用研究することによっても全体として自然から自由にはならず、結合を多様化することによって自然の本質あるいは運行の個々の偶然の場合からのみ独立できるのである。p.40

## (6) 中間項の重要性

環境決定論の最大の論理的欠陥は、自然と人間との関係において両者をストレートに結びつけ、両者の間に介在している媒介項・中間項を無視している点にあると一般に言われている。そして、ラッツェルの地理学がまさにそうだとされてきた。しかし、ラッツェルは社会的・経済的条件をはじめ、様々な媒介項・中間項を十分に考慮している。このことから、ラッツェルをいわゆる環境決定論者とするのは正しいとはいえない。

### ●資料

ミ この方面の研究にあたって頻繁に現われる重大な過失は、疑問の余地なく明瞭な結果とそれから隔たった自然的要因との間の、ある中間項が軽視されていることである。中間で作用するという迂回路の代りに直線路を進む傾向は、長大な時間を軽視するのと似ている。それは誤った結論に導くか、さもなくば一般に正しい結論には到達し得ない主張に導く。相当高度の精神的生物に及ぼす自然の影響は、たいてい、相互に非常に密接に結合している経済的・社会的諸関係を媒介として行われるのである。p.34

ム 我々が中間項の看過に起因するこのような明白な誤謬を、特にここで強調するゆえんは、それらが効果の豊かなものの一つだからである。これらの誤謬は誤謬それ自体を避ける方法だけでなく、なによりもまず精神的基盤の上に乗っている社会と国家の制度の本質を最も良く洞察し得る方向にも暗示を与えるのである。すなわち常に自然的基礎からその第一次の影響へ、そしてこれから進んだ影響へと移行することである。多くの影響がこの方向で継続することによってのみ、最も外部にあるが最も重要な根源を看過してしまう危険を免れることができるのである。p.35

メ 人口段階は文化段階と一定の関係にある。最も低い文化段階は希薄な人口と対応している。牧畜民族も農民より大きな空間を必要とする。その場合空間要求は経営の集約度によって様々である。鋤と施肥を欠き念入りには行われぬインディアンや黒人の農耕は、同じく鋤と施肥の手段を利用する地球の上で他に匹敵するものがない中国人の園芸的農耕よりも大きな空間を必要とする。最も稠密な人口は、交通によって外部から食物を入手することによって、人間が自分の生活ができてい土地の生産物から独立的になることに存在する。したがって大都市とその工業地区、ペルーやボリビアでの鉱業地区においては、その住民の10分の1に対してしか食物を十分に供給できない。第二巻 p.181

## (7) 可動性、歴史的移動

ラッツェルは、可動性を人類（生物）の本質的特性の一つとした。可動性は地理的にみると移動（空間的）として顕現し、これが人類地理学の重要なテーマの一つであるとする。移動は人類の誕生以来、頻繁に、あるいは大規模に、あるいは小規模に行われてきた。これが歴史的移動である。

したがって、人類・民族の移動は原始時代からの長い時間的スパンの中で考察しなければならないことになる。このことから、ラッツェル『人類地理学』においては、現在における人類という観点だけでなく、人類の時間的・歴史的観点がきわめて重視されている。環境決定論に対する批判の一つとして、歴史的考察・時間的考察の無視が指摘されているが、ラッツェル『人類地理学』にはそのような批判はあてはまらない。このことから、ラッツェルを環境決定論者とすることは不適當である。

移動を考慮するということは、現在の人類を現在の環境の中だけで考察することは正しくないということを意味する。ラッツェルは、人類・民族を発祥地一経過地一現在地という中で考察する必要があることを強調している。

### ●資料

モ 現代の自然科学者があらゆる生物の漸次的変化の根本原因としており、長い期間の後に生物進化史の示すような著しい結果をもたらす不変的な2特質は、可変性と遺伝である。前者は差異を生み、後者はこれを子孫に伝える。自然条件の変化が変異の発生に強く影響することは疑いない。 p.31

ヤ 時間の問題はなんといっても最も重要であって、これに深い注意をはらわなければこの問題は全然解決できない。 p.37

ユ 我々は1民族が現在の環境に生活してきた時間がどれだけの長さであったかを知らない以上、民族の本質をその自然条件で絶対に組み立てようとする試みは断念しなければならない。民族はその居住している土地の所産であると述べるならば、彼らの祖先が住んださまざまな「土地」が彼らに遺した影響が現在まで作用を続けていることを忘れてことになる。 p.37.

ヨ 自然が人間に及ぼす影響は、この影響を受けた人間や民族とともに移動し、遠隔地にまで運ばれるのである。ゆえに民族の本質はその民族が現在住んでいる環境だけからでは説明できない。なかんずく精神的獲得物は思想に固有の伝播力によって移動し、もしかするとその発生には全然向かないであろうような地域に定着するのである。宗教的思想ほど「土地の個性」を多く有する思想は少なく、しかもこれほど移動したものはない。 p.37

ラ あらゆる生活と同様、民族の生活も移動となって表現される。民族の拡大はこの移動の表徴であり、またこれによってのみ理解することができる。可動性は民族生活の一つの本質的特性であり、それはどの民族にも、たとえ一見静止しているかに見える民族にも固有のものである。 p.75

リ 地理学者は人間・民族・国家の可動性をそれらの有機体的性質の表現の一つと解することによって民族学者に先んじている。 p.76

ル 担い手によってたとえ異なっても、歴史的移動が土地から離れられないこと、したがってその土地の大きさ・位置・形状にまったく依拠しなければならないことは様々の移動に常に

共通である。p.77

レ 地理的に解すれば民族の歴史は内的小および外的な動きから成っているのであるから、我々はこの可動性の表現を歴史的移動と名づけるのである。p.78

ロ すべての生物と同様に人類も拡大しようと努力している。有機体は可動的で適応力があればあるほど広範囲に蔓延し、弱い血族を敏速に押し返す。そして、最も好都合な場合には地球の全生活空間に優越する。p.159

ワ どの人種もどの民族も、限られた地域から出発し、自然的障害か強力な競争が敵対するまで絶えず拡大したということは疑い得ない。p.161

### 3 ラッツェル『人類地理学』の地理教育論的意義

以上、ラッツェル『人類地理学』の特徴を7つの観点から考察し、ラッツェル地理学に対する誤解・偏見の是正を試みた。端的に言えば、ラッツェルは環境決定論者ではないということである。これらをふまえ、地理教育論的立場から見たラッツェル『人類地理学』の今日的意義として次の3点を指摘したい。

#### ① 自然的条件（自然、地球、空間、土地）の重要性の再認識

わが国の地理学習においては、環境決定論（自然決定論）を忌避するあまり、自然的条件は軽視されてきた。ラッツェルが環境決定論の代表者であるとされ、ラッツェルが否定されるという傾向にあった。確かに、ラッツェル『人類地理学』は地域・歴史に対して、自然的条件が永続的に重要な条件をなしていることを主張している。しかし、この主張はいわゆる環境決定論ではなく、「環境（自然）基盤論」ともいふべきものであり（山口 2007）、今後、地理教育において十分に考慮されるべき注目すべき考え方である。

今後の地理学習（特に地誌学習）においては、ラッツェルの考え方をふまえ、自然的条件を積極的に取り上げていくことが求められる。自然的条件からのアプローチは、他分野にはみられない地理独自のアプローチであり、地理の持つ意義を広くアピールしていく上で貴重な貢献をするものと思われる。その際、自然は条件として作用しているのであって、決定要因として作用しているのではないこと、また、自然そのものを学習するのではなく、自然と人間との関わりという観点からみた自然的条件を学習することに意味があることを確認しておきたい。

#### ② 「空間拡大による発展」の原理の重要性

ラッツェルによれば、人類・民族・国家の発展とは空間的に拡大することである。人類が発展するためには空間的拡大が不可欠のものとされる。ところが、空間には限度があり、そこで、空間をめぐる闘争が起こる。人類は過去において激しい空間闘争を繰り広げてきたが、今後も、形・方法は異なるとしても、地表空間における空間闘争は続いていくであろう。

ラッツェルが指摘した最大空間であり空間的限界であるところの地球空間そのものが限界に近づいているとされるのが今日の状態である。そこで、今後、どのようにして空間を拡大していくのかということが人類の未来的課題として浮かび上がってくる。ラッツェルの「空間拡大による発展」の原理を敷衍していけば、人類が今後発展していくためには、地球空間を越えて宇宙空間へと拡大していかなければならず、そうしなければ人類の発展はないことになる。今日における世界各国の各種宇宙開発プロジェクトこそ、人類の新たな空間拡大への挑戦と闘争を意味するものではなからうか。宇宙空間への拡大はラッツェルの時代には考えられなかったことであるが、ラッツェルの「空間拡大による発展」の原理そのものは生きているのである。

宇宙開発をこのように位置づけることによって、「空間拡大による発展」の原理を地理教育における有効かつ未来展望的な地理的見方として確立していくことができるであろう。

### ③ 地球的一体性、生命的一体性への関心

自然・生物・人間は地球の中で生起し存在してきたものであることから、ラッツェルは自然・生物・人間の地球的一体性を強調し、同じ観点から、植物・動物・人間の生命的・生物的一体性を強調した。もちろん、人間が他の生物とは異なる特別な地位にあることをふまえた上での話である。

地球的・生命的一体性という考え方、地球がなければ人間存在はないという考え方は、上の②の地球空間の限界という点とも関わって、今後の地理教育の展開にとって重要な理念を提供するものではなからうか。これはまた、西洋的自然観・東洋的自然観の問題とも絡んでくるものであろう。

今日、地球・自然の人間生態的限界が強く指摘され、それを論拠に環境教育論、開発教育論等が展開されているが、ラッツェルは一世紀以上も前に地球・自然の限界、地球的一体性を主張していたのである。地理関係者はこのことを誇りとし、ラッツェルの考え方について深く研究することによって、この問題に関する教育論をリードしていくべきと思われる。

本稿内容は、日本地理学会「地理教育理論研究グループ」研究集会（静岡大学浜松校舎、2006.9.23）にて発表したものである。

### 注

1 この点については、本文中の資料ロ及びワを参照のこと。その他に下記文章を参照のこと。

「進化の為には広さが必要であるが、地球の表面は限られた広さでしかない。どこでも古い生物と新しい生物が並んで死闘しつつ生活している。……生存の為の競争は空間獲得の為の闘争を意味するのだ。」（サンプル 1911, p.161）。

「決して休むことなき生命の運動と、決して大きさの変わることなき地球の空間とのあいだに対立が生じる。この対立から空間をめぐる闘争が生まれる。ラッツェルにとって、生存競争は本質的に空間をめぐる闘争である。」（シュタインメツラー1956, p63）

**参考文献** (著者名 50 音順)

- 飯塚浩二 (1940) 「解題」、ブラーシュ (1922)、飯塚訳『人文地理学原理上巻』、岩波文庫。
- 飯塚浩二 (1949) 『人文地理学説史』、日本評論社。
- クラヴァル (1975)、竹内啓一訳 (1975) 『現代地理学の論理』、大明堂。
- シュタインメツラー (1956)、山野・松本訳 (1963) 『ラッツェルの人類地理学—その課題と思想—』、地人書房。
- 水津一郎 (1974) 『近代地理学の開拓者たち』、地人書房。
- センプル (1911)、金崎肇訳 (1979) 『環境と人間—ラッツェルの人類地理学の体系に基づく—上巻』、古今書院。
- 野間三郎 (1967) 「近代地理学の発達」、木内信蔵・西川治編『地理学総論』、朝倉地理学講座 1、pp.10-61。
- 山口幸男 (2007) 「ラッツェルと環境決定論」、社会科教育 No.572, pp.14-15。
- 由比濱省吾 (2006) 「今なぜラッツェルか—『フリードリヒ・ラッツェル人類地理学』の翻訳を終えて—」、地理 51-8, pp.84-90。
- ラッツェル (1882, 1891)、由比濱省吾訳 (2006) 『人類地理学第一巻、第二巻』、古今書院。